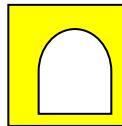


日吉台地下壕保存の会会報



第161号
日吉台地下壕保存の会

2025年度総会開催のお知らせ

副会長 亀岡敦子

世界中を巻き込み、子どもから高齢者までの死者数、6千万人から8千万人ともいわれる第2次世界大戦が終わってから80年が経ちました。この間も、人々は過去を忘れたように、内戦や内乱は止むことがなく、侵略する側は常に自衛の戦争である、と言いたい募ります。

ロシアもそう言ってウクライナに侵攻しましたし、イスラエルはガザ地区に攻め入り、ここは自分たちのものだ、と言い張って破壊の限りを尽くしています。世界のあちこちで、戦争の気配を感じるようになったのは、決して氣のせいではないでしょう。2000年頃から、学徒出陣世代の方々の、1930年代の戦争前夜とよく似てきた、との言葉に寒気を覚えます。このような世相の中で、私たち日吉台地下壕に関わる者にできるのは、目の前の戦争遺跡に向かい、目の前の一人ひとりに語り伝えることだと思うのです。

あれほどの猛威をふるった新型コロナが終息したとは思えませんが、本年の総会も、昨年同様、記念講演を併催します。講師は慶應義塾高等学校の理科教諭の、岩石地質学と地史学がご専門の杵島正洋氏です。演題は「日吉の丘から学ぶ地球の営み」という、日常生活から離れたテーマですが、それだけに好奇心が湧きます。日吉は下末吉台地の北東端にあり、台地と低地が入り組んだ特徴は関東全域に見られ、日本の平野の成立史を理解する上で最適な教材だそうです。興味がわきます。会員の皆さんとも、なかなかお目にかかる機会もありませんが、年に一度の総会にぜひお越しくださいますよう、お誘いいたします。

2025年度総会のお知らせ

日時：6月28日（土）午後1時～4時
会場：慶應義塾日吉キャンパス
来往舎大会議室（2階）

スケジュール：

◎講演会 午後1時～3時

演題「日吉の丘から学ぶ地球の営み」
講師 杵島正洋氏 慶應義塾高等学校
理科教諭 慶應義塾大学非常勤講師

◎総会 午後3時～4時

議案
2024年度の活動報告及び会計報告
2025年度の活動方針・予算・役員選出

【目次】

<u>巻頭言【1p】</u>	2025年度総会開催のお知らせ	副会長 亀岡敦子
<u>お知らせ【2p】</u>	横浜大空襲から80年「第30回2025平和のための戦争展inよこはま」 戦争展事務局・本会会員 吉沢てい子	
<u>連載【3-5p】</u>		
①日吉海軍・設備アレコレ(41)	地下壕と待避壕、地下施設、隧道、防空壕	運営委員 山田 謙
②海外戦跡めぐり(28)	フィリピン戦跡Ⅱ レイテ沖海戦と台湾沖航空戦の「大戦果」	運営委員 小山信雄
<u>報告【6-8P】</u>		
③下田町のフィールドワーク		運営委員 小野由紀
④明治大学平和教育登戸研究所資料館の見学		運営委員 岸本 正
<u>ガイド学習会再録【8-9p】</u>	谷口吉郎の建築について(2)	運営委員 佐藤宗達
<u>見学会の感想文【10-15p】</u>	湘南藤沢慶應高校	
<u>報告【15p】</u>	慶應義塾2025入学式と卒業50年生大同窓会	運営委員 小山信雄
<u>活動の記録【16p】</u>	2025年1-4月	

お知らせ

横浜大空襲から80年—「第30回2025平和のための戦争展 in よこはま」のお知らせ

戦争展事務局・本会会員 吉沢てい子

5月29日の横浜大空襲の日にあわせて開催してきた戦争展は、今年で30回目を迎えます。今年は、5月25日（日）「特別企画1」、5月31日（土）「特別企画2」、5月30日から6月1日（日）「展示」をかながわ県民センター（横浜駅西口）で開催します。

今年は横浜大空襲から80年、被爆80年、沖縄戦から80年。そして、今、イスラエルによるガザへの攻撃が続いています。

80年前、横浜大空襲で8千人以上もの命が奪われ、当時の市民の約半数の31万人が被災しました。ヒロシマ・ナガサキでは原爆投下で21万人が、沖縄戦では20万人が命を落としました。

そして、今、ガザではイスラエルの攻撃で5万人が亡くなり、230万人の人口のほとんどの人々が家を追われ、飢餓に追い詰められています。沖縄では台湾有事を想定した基地強化や避難計画が進められています。

戦争展が戦争の悲劇を忘れず繰り返さず、平和に貢献できるものにと願って企画しました。具体的には、5月25日の「特別企画1」は、「被爆80年、ノーベル平和賞受賞・オスロからニューヨークへ、そして、これから」と題して、日本被団協事務局次長で戦争展実行委員長の和田征子さんの挨拶と講演を、丸木俊さんの絵本「ひろしまのピカ」の朗読を俳優の岡崎弥保さんに、横浜大空襲体験者の藤原律子さんには

「忘れられない記憶」を語り継いでいただきます。NGO/グローカリーには「横浜大空襲の現場に向き合う～戦争犠牲者を数字で終わらせないために」と題して報告して戴きます。

5月31日（土）の「特別企画2」は、「戦後80年、核も戦争もない世界を」と題して、慶應義塾大学名誉教授の小沼通二さんに講演を、「マブニのアンマー・沖縄の母～沖縄を再び戦場にしない」と題して日吉台中学校演劇部による朗読劇を、「祖父のインドシナからの書簡」を今村睦さんに報告して戴きます。

5月30日（金）から6月1日（日）までの「展示」は、横浜大空襲から80年、猛火の横浜、焼け跡の市街、空襲体験画、横浜の戦跡、日吉台地下壕、野島掩体壕、船と戦争、アジアでの戦争、被爆80年、高校生が描いた広島・原爆の絵、日本被団協のあゆみ、教科書、占領下の横浜、横浜・沖縄の米軍基地、サイゴン解放50年、憲法、平和のバラ、WFPなど展示します。

戦争のない核も基地もない、命が大切にされる世界をどのように築いていけるか、若い人たちとともに考え平和な未来のために役割が果たせる戦争展にしたいと願っています。



横浜大空襲 野毛山不動尊からの焼跡

連載**日吉海軍・設備アレコレ(41)****地下壕と待避壕、地下施設、隧道、防空壕****運営委員 山田 譲**

私たちは日吉地区の海軍地下施設群を「地下壕」あるいは「待避壕」と呼んでいます。「待避壕」は第一校舎脇のグラウンド側に築造された地下施設です。ここは空襲の時に避難する場所で普段は使わないので、他の地下施設と区別して待避壕と呼んでいます。この呼び方は第3010設営隊の伊東三郎元隊長の回想記（『海軍施設系技術官の記録』所収）の記述にならったものです。退避壕でもいいのでしょうか、退却のイメージを嫌って「待避壕」と書いたように思われます。普通なら防空壕ですが、これだと民間のもののように聞こえるので軍隊らしい言い方にしたのでしょうか。

他方「地下壕」という言葉は、戦時中の海軍は使っていませんでした。戦後、使われるようになった言葉のようです。伊東三郎氏の昭和47年の上記回想記では「地下施設」と書かれていて、1か所だけ「隧道」「地下壕」と書かれています。連合艦隊司令部情報参謀の中島親孝氏の回想記『連合艦隊作戦室から見た太平洋戦争』でも「地下施設」と書かれています。また海軍施設本部の「築城施設術参考書」などの内部文書では「隧道」「築城隧道」と書かれています。第3010設営隊の行動記録文書でも「隧道」です。ですから日吉の地下壕・待避壕の海軍での正式名称は、「隧道」あるいは「築城施設」ということのようです。ただ軍令部第一部の文書では「地下施設」とも書かれています。

ちなみに伊東三郎氏の回想記によると、終戦直後の米軍の星条旗新聞には「地下大要塞」と書かれていたそうです。ただ日吉の地下壕は戦闘用の要塞ではなく、司令部や事務仕事の場所でした。

海軍が地下壕築造を初めて大規模におこなったのはラバウルです。ラバウルの第11航空艦隊司令長官兼南東方面司令長官だった草鹿任一（草鹿龍之介の従兄）が『ラバウル戦線異状なし』という回想記を書いています。それによると「掘った穴の長さ延べ海軍70キロ、陸軍80キロ、合計150キロ」と報告されたそうです。この「穴」のことを筆者は「洞窟」「大防空壕」と書いています。司令部の壕は「金剛洞」と呼び、他に「地下病院」「地下倉庫」もありました。しかし地下壕という言葉は使われていません。

では地下壕という言葉はいつごろから使われるようになったのでしょうか。防空壕という言葉は戦前から使われていました。1940年12月に「防空壕構築指導要領」が出されています。また軍需工場を地下に移す工事も各地でおこなわれていて、これは「地下工場」と呼ばれました。松代大本営地下壕の場合は「松代倉庫工事」という秘匿名です。

ただ伊東三郎氏の回想記に地下壕という言葉が出てくるので、これが書かれた昭和47年には使われていた言葉です。この地下壕という場合には民間用の防空壕と区別して、戦時に掘った地下軍事施設という意味で使われます。

なお行政用語として「特殊地下壕」というのもあります。これは戦時に掘られた地下施設全般を指します。崩落などの防災対策対象物ということです。（昭和49年「特殊地下壕対策事業」）

私たちは日吉台地下壕という言葉を何気なく使っていますが、地下壕という言葉には過去の戦争の記憶を呼び覚ます戦争遺跡という意味が強く感じられます。戦後の平和運動と戦争遺跡保存・活用の市民運動の積み重ねが、この言葉の背後に見えてくるようです。

《人事局地下壕は兵備局地下壕？》

話は変わりますが、前号で河崎三千夫さんへの聞き取りを記事にしました。その中

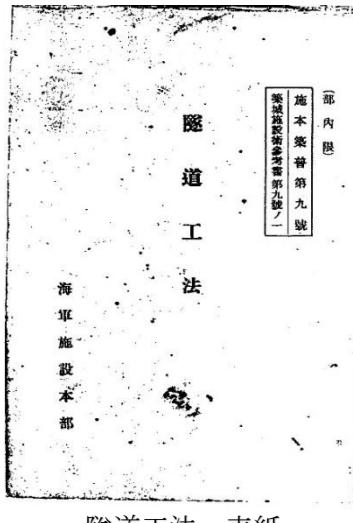
で河崎さんは兵備局第4課の軍属として日吉の人事局地下壕で勤務していたとのことでした。

そうすると私たちが人事局地下壕と呼んでいる地下壕は、人事局・兵備局地下壕ということになりそうです。ちょっとやっかいですね。

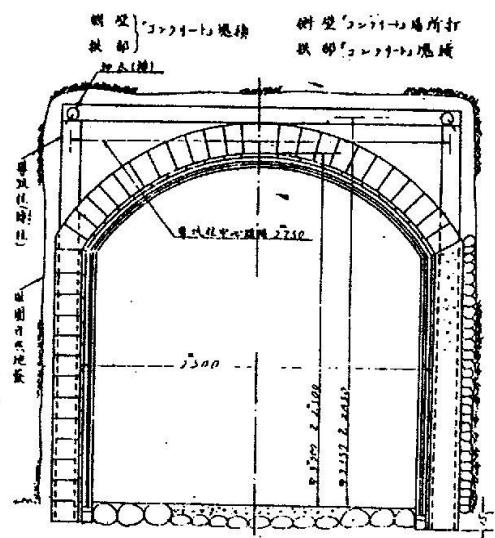
それで調べてみたのですが、今まで通り人事局地下壕でよいようです。調べたのは『図説総覧 海軍史事典』（編著者小池猪一 監修末国正雄 国書刊行会 昭和60年刊）です。監修の末国氏は海軍省人事局員でしたから記述には信頼性があると思います。

河崎三千夫さんの仕事は海軍軍需工場の工員・勤務者の管理と確保でした。この仕事は昭和15年11月15日に新設された兵備局の、第2課の担当業務「軍需工場動員の統制、物資の生産力拡充」でした。それが昭和17年4月1日に機構変更されて兵備局第4課が新設され、その業務は「労働力需給調整、徵用」でした。河崎さんはその時、兵備局第4課に軍属として配属されたようです。しかし昭和20年2月28日から5月1日の間に、兵備局は廃止され人事局に第4課を新設し、その業務は「勤労の需給調整の統制、国家総動員法の徵傭、その他勤労一般」でした。したがって河崎さんの仕事は同じなのですが、所属は人事局第4課に変更されていたわけです。

そういうわけで河崎さんの話とすりあわせれば、河崎さんが日吉に来た昭和20年5月の時点では河崎さんの所属は人事局第4課でした。ですから河崎さんの勤務した地下壕は人事局地下壕でよいわけです。それにしても海軍の組織変更はゴチャゴチャしていますね。戦況の悪化に直面してアタフタと対応に追われていた様が見えるようです。



隧道工法 表紙



隧道工法 第七圖型枠組立及び覆工

連載

海外戦跡めぐり(28) フィリピン戦争遺跡II

レイテ沖海戦と台湾沖航空戦の「大戦果」 運営委員 小山信雄

1944（昭和19）年7月7日、サイパン陥落で絶対国防圏が破られ、米軍は一路西進を加速。日本は米軍侵攻の可能性を、フィリピン（以下比島）、沖縄県・台湾・揚子江下流三角地帯、本土、北海道・千島・樺太の四方面とし、米軍は比島レイテ島を最初の上陸地点と決定。10月に比島での決戦（捷一号作戦）が行われることとなりましたが、米軍は上陸作戦に先立って制空権・制海権確保の為、空母機動部隊による沖縄・台湾・比島北部にかけ点在していた日本軍の航空基地空爆を決定。当時の事実関係は下記の通り。

10月10日 米機動部隊、沖縄・台湾・ルソン北部に空爆開始。

10月12日 日吉連合艦隊司令部、「基地航空部隊捷号作戦警戒」発令。
(台湾沖航空戦：米艦隊への夜間攻撃を開始)

※10/12～19 大本営は連日「大戦果」を国民に発表。

10月16日 海軍は「索敵機が台湾沖で米空母7隻含む機動部隊を発見」の報告受け、戦果に誤報あること確認。

10月17日 日吉連合艦隊司令部にて「大戦果」を佐官4名が検証（連合艦隊航空参謀 淵田美津雄、同情報参謀 中島親孝、軍令部航空参謀 鈴木栄二郎、第二航空艦隊航空参謀 田中正臣）⇒「大戦果」は誤認（いくら上積みしても空母4隻撃破（※戦闘不能の状態にすること）程度で沈没はまずあるまい）

10月20日 ◎米軍、艦砲射撃支援のもと、レイテ島タクロバン等に上陸開始。

◎比島決戦にむけた帝国陸海軍合同作戦会議においても、大本営海軍部は陸軍部に真相（大戦果の誤報）を伝えず。

10月21日 大本営発表：最終的に5日間の航空攻撃の戦果「敵空母11、戦艦2、巡洋艦3隻を轟沈（短時間で沈没）、空母8、戦艦2、巡洋艦4隻を撃破（※）」と発表。米機動部隊を壊滅させる大勝利に昭和天皇から戦果を賞する勅語発令。

⇒だが実情は、米空母・戦艦は爆撃で損傷あるも1隻も沈んでおらず。

10月22日 豊田副武司令長官「将兵一同、必死の体当りの勇戦によって敵を殲滅すべし」と訓示。連合艦隊の各艦隊はそれぞれの停泊地から出撃。比島沖海戦の開始。

10月24～26日 海戦の結果、小沢艦隊（空母4隻沈没し全滅）、栗田艦隊（戦艦武藏等戦艦3隻、巡洋艦10隻失う）、西村艦隊壊滅。連合艦隊は事実上壊滅し、太平洋における制空権、制海権、戦闘能力を完全に失う。

9月29日、日吉にやって来た連合艦隊司令部にとって最初で最大の決戦であったはずのレイテ沖海戦が上記のような結果に終わった。台湾沖航空戦に参戦した航空兵達は熟練度の低い若者中心であり、当時の悪天候（台風シーズン）、夜間攻撃の困難などあり現場の情報分析は困難を極めたかも知れない。しかしながら、日吉連合艦隊司令部の佐官達が正確な戦況分析を行っていたにも関わらず、肝心の作戦に活かされることなく、「米機動部隊壊滅の誤情報」を元に比島作戦を展開。連合艦隊の壊滅ならびに、「本来ルソン島決戦」であったはずの第14方面軍（山下奉文陸軍大将・司令官）に無茶な「レイテ島決戦」に強硬に変更させ、海軍の敗北により補給路を断たれた陸軍は、武器・弾薬・食料も底をつき餓死者が続出。ほぼ全滅ともいえる8万人近い戦没者を出すことになった。

真実に基付かない行動が良い結果を生むはずのないことなど、誰が考えても明白なこと。大本営等当時の日本の命運を握っていたはずの指導層は一体何を考えていたのか。こんな事にも思考が及ばなかった現実に、呆れるを通り越し、嘆かわしく思うばかりです。

これは正に忘れてはならない「負の遺産」。改めてあの戦争の歴史の事実を私たちは学んでゆくべきと強く感じます。いつの時代になっても、真実を見つめる視点を失ってはならないと思います。



米軍上陸75周年記念碑



マッカーサー上陸記念公園
レイテ島タクロバン

1942.3.17 脱出先の豪州で I shall return のスピーチを行い、1944.10.20 I have returned と実現

報告

下田町フィールドワーク

運営委員 小野 由紀

早春の日差しに恵まれた2月15日（土）、会員13名と小学生のお孫さんで、下田町フィールドワークへ出かけました。日吉キャンパスは御馴染みながら、下田町へ足を延ばすのは初めてというメンバーがほとんど。今回は下田地蔵尊こと眞福寺と日吉の森庭園美術館を訪ねました。この辺りは武藏野の面影が色濃く残っています。

まずは眞福寺、ご案内くださるのは副住職氏。四百年の由緒がある曹洞宗の寺で、丑年に觀世音菩薩の、酉年には子育延命地蔵菩薩の御開帳が行われています。アジア太平洋戦争末期、この寺へ日吉台国民学校の児童が疎開をしてきました。当時、子ども達は本堂で雑魚寝をし、境内にあるニッケイの甘い香りにつられ幹をかじっては、住職にたしなめられることもあったとか。哀しい疎開のエピソードも伺いました。

ついで日吉の森庭園美術館へ。もともとは、関ヶ原合戦後、この地を拝領したという田邊家のお屋敷です。「日吉の森庭園」「田邊泰孝記念館」「田辺光彰美術館」の三つから成り、学芸員の田邊氏がご案内くださいました。港北公会堂を飾る芹沢銈介デザインの緞帳・下絵や、下田の街角で見かける（先代）光彰氏の彫刻作品など、お庭以外の見どころも、たくさんある地元の美術館です。

さて、メンバーが最も関心を示したのは防空壕でした。眞福寺、日吉の森庭園美術館それぞれで、特別に案内していただきました。「壕があると入らずにいられないのは、もはや地下壕ガイドの性」と某メンバーが言う通り、一同、民間の「防空壕」を謹んで体験しています。昼間でもライトが必要な暗がりと、土の匂いが強烈に印象に残りました。眞福寺の壕は、疎開児童が掘った可能性はあるものの、詳しくはわからず。庭園美術館では、先々代が掘り、戦後も、また使うときがくるかもしれない、もくもくと修繕を続けていたそうです。転ばぬ先の杖でしょうか。

その後、松の川緑道を抜け、日本ラグビー蹴球発祥記念碑、井上正夫之碑を見学して歩くうちに、日吉台国民学校、現在の日吉台小学校へ到着。眞福寺から30分ほどの道のりでした。こんなに近いところへ、わざわざ子ども達を疎開させていたとは。

地域の歴史を実感でき、考えさせられることの多いフィールドワークでした。



眞福寺にて集合写真

眞福寺のお地蔵さん

日吉の森庭園美術館にて
集合写真

横浜市認定歴史的建造物
田邊家住宅
日吉の森庭園美術館
建設中：主屋 江戸末期～明治初期（昭和）
本館：1901（明治34）年（復元）
現存する建物
2015 横浜市

報告

明治大学、平和教育登戸研究所資料館の見学をして
運営委員 岸本 正

3月29日土曜日午後、亀岡副会長の企画により明治大学生田キャンパス内にある平和教育登戸研究所資料館の見学を行いました。小雨の中というあいにくの天候にもかかわらず、会員とその他同行家族を含む18名の参加を得て実施されました。

始めに資料館設立の経緯を表すビデオを視聴後、設立に多大な貢献をされた明治大学講師で元法政二高教諭渡辺賢二先生による展示解説を1時間余りにわたり受けました。終始穏やかな語り口の中で、ご自身の調査研究や生徒への指導実践にもとづく確かな事実を広く世に伝え、次世代に引き継ごうとされる意思を感じ、胸を打たれました。小生自身、山田朗館長の企画展解説は聴いたことがあります、渡辺先生のお話を伺うのは初めてでしたのでとてもよい経験となりました。

解説の内容ですが、五つの展示室を、順を追って案内していただきました。第一室では、先生ご自身が古本店に依頼して入手されたという「状況申告」の紹介、第九陸軍技術研究所（登戸研究所の正式名）の予算獲得のために使われた貴重な公文書とのことでした。当時登戸研究所で使われた金額は、他の機関に比べ甚大なものであり、それほど陸軍から期待されていたということです。

第二室では、「特殊気球フ号装置」と呼ばれた風船爆弾の模型を前に、その開発や飛行の様子について説明を受けました。偏西風によって運ばれる気球に搭載されたのは爆薬だけでなく最終的には細菌兵器であったこと、米国オレゴン州で数名の犠牲者を出していること（ブライの悲劇）などを知りました。なお、通路側の展示では、近年話題となった小林エリカさんの著書『女の子たち風船爆弾をつくる』に関連するパネルが掲示されました。

第三室では、秘密戦で用いる防諜・諜報・謀略・宣伝に関わる特殊兵器の開発が展示されています。登戸研究所の中でも七三一部隊や中野学校などと最も関係が深かった科といいます。中でも班長のひとりとして所属していた伴繁雄氏（当時技術少佐）は、戦後研究所での活動について一般には一切口を開きませんでしたが、熱心に取材に臨む高校生たちには、その熱意にほだされて少しづつ話し始めたとの逸話は感動的です。

第四室は、偽札製造に関する解説。高度な印刷技術を用いて紙幣の偽造と散布をしたのは、中国経済の混乱を意図したものといいます。中でも興味深いのは、製造した偽札をわざと古札化したのは中国の習慣によるものとのことです。また、印刷や保管に使われていた木造施設が資料館右手下に十数年までありました。老朽化による倒壊の恐れがあったため取り壊されたとのことです。その建物の構造がわかる模型や部材の一部なども展示されました。

第五室では、敗戦直前ににおける登戸研究所の信州などへの移転の様子が展示されています。また、戦後しばらくたち平和教育資料館として生まれ変わる経緯も説明されています。展示物



館内を説明される渡辺賢二先生

の中でも注目されるのは、1989年赤穂高校の生徒たちにより、伴繁雄氏邸から発見された多数の瀧過筒です。法政二高生徒たちにより石井四郎七三一部隊長による石井式瀧水器もその後確認されたとのことでした。また、1948年の「帝銀事件」は七三一部隊や登戸研究所関係者の関与が疑われる中、捜査はうやむやにされたとのことでした。戦後もしばらく登戸研究所は闇に包まれていたわけです。

多くの展示物の中でとりわけ私が目を惹いたのは「雑書綴」という当時関さんというタイピストとして働いていた女性が残した記録です。多くの書類が秘密裏に隠滅されてしまった中で、たいへん貴重なものとあらためて認識しました。記録を残すことの大切さを感じるとともに、幹部によるものでなく一般女性がたまたま残したものであることが奇跡のように思えます。

館内見学を終わって、当方の感想は、登戸研究所資料館は多方面の協力・支援により理想的な形で平和資料館として設立され現在に至ると知り、そのことに強く感銘を受けます。渡辺先生と高校生たちの実践はもとより、大学当局・OB団体である登研会・地域・行政などが困難はあったと思いますが、それぞれが有機的に連携し合うことによって現在の形に結実したと解釈します。その意味で当会と、日吉台地下壕自体のあり方の今後のお手本となるのではないかとあらためて痛感させられました。

渡辺賢二先生にはよい学習の場と当会の今後の指針を賜り、深謝申し上げます。

ガイド学習会再録

谷口吉郎の建築について（2）

（2024.11.4 於日吉地区センター中集会室） 運営委員 佐藤宗達

③ 谷口吉郎著『国際建築』より「慶應義塾寄宿舎」の項の引用

塾の楨さんから今度建つ寄宿舎のお話があって、土地を見に行くことになった。出がけに案内の宗さんは、時雨ぎみの空を気にして下さったが、日吉に着いた頃は丁度よく薄日が指し出して来た。何時もながら、市中から出て来て広い日吉の空を仰ぐ気持ちはない。手入れの行きとどいた構内の舗装道路を過ぎ、自動車の車が土の中にめ入り込む位奥まった所で、「こゝが予定地です」と云われ車を下りる。

見ると静かな雑木林の丘なので、まづ「これはいい」と思う。葉の落ちた檜や櫟の林を透かして、前方に広い空が見える。向こうは崖らしい。右手をみると、こゝも傾斜地になっていて、下は茂った杉林で埋まっている。左手はもっとひどい絶壁らしい。三方とも崖になった高台なら「ますますいゝぞ」とつぶやきながら、腰まで延びた笹藪をかけ分けて進んで見ると、土地の高低が割合にひどく容易に這入れない位だ。然しこれ位なら、地ならしもたいしたこともあるまいと考えながら、漸く小径を見付けて崖の上まで出て見ると、素晴らしい眼界だ。足の下には一面に広い平野が、遠く横浜や鶴見らしいあたりまで続いている。見下すと、崖下に民家の屋根が、一軒小さく真下に見える。大分急な傾斜らしく、45度位もあるだろうかと下を覗き込んで見る。高さ150米位かなと目測してみる。然し、地盤は固そうだから心配もあるまいと心に思いながら、岬のように突き出た崖のとつ先まで進んでみると、展望が一層拡大される。それから右に迂回すると、すぐ手前に、こんもり杉の茂った小山が見える所へ来て、視界は今までの広い平野から深閑とした森の丘陵に変化する。

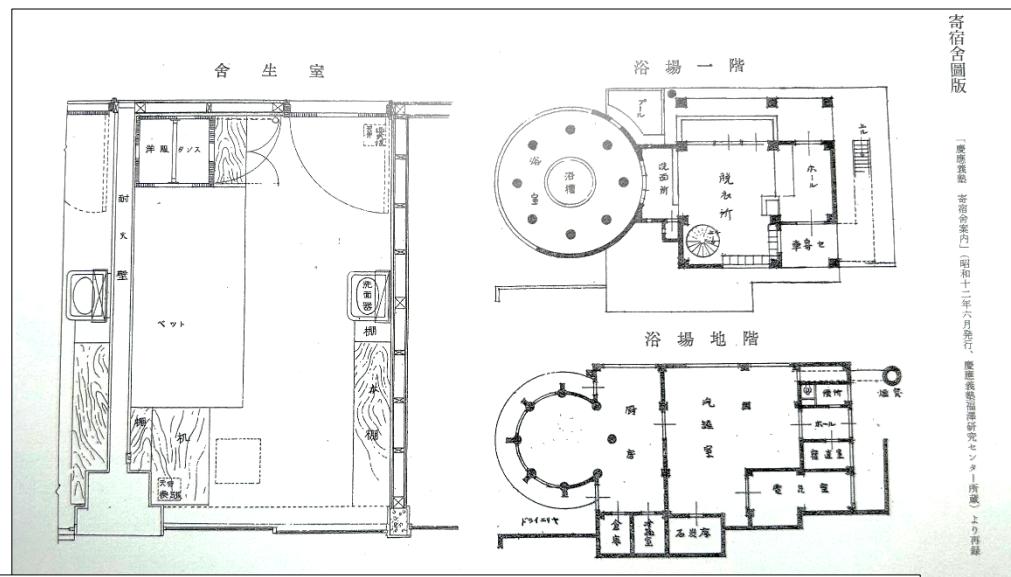
生憎寒中なので杉の葉は赤く陽に焼けているが、新芽の頃にはきっと目にしみ込む位、冴え冴えと美しいに違いない。そんなことを考えながら、このいゝ展望をどう取り扱おうかと、そろそろ設計の案を練る下準備が頭の中に浮かんで来る。周囲を一巡してから、更に深い藪の中へ押し這入り、藪地の中央と思しき地点に立って、太陽の位置と磁石によって方位を確かめる。それから、もう一度ゆっくり、あたりを見直し目立った木の位置や、土地の高低、地形の様子などを大体脳裡に記入して、こんど正

確に出来あがる測量図面を見るときの目安にする。

周囲の静けさが、俳味のように身にぢかに感ぜられて来る。木立の様子が、いつぞや見た落葉の屏風を想い起させる。そんな静けさの中にしばらく立ったまゝ浸つていると、不意に、何か笛をかさこそと押しわけて来る物音に驚かされたが、音の様子から、すぐ犬だとわかった。続いて猟銃を肩にした一人の男がさっきの小径に立ち現れたが、その男は無言のまゝ崖の方へ下りて行った。そう言えばさっき頭の上でチチと鳴き過ぎたのは渡り鳥の群らしかった。なんだか急に人里を遠く離れたような気持ちが湧き上がって来て、小学読本で習った「ドンと一発銃声」の文章が想い出されて来る。やがて気にして居た空模様もとうとう時雨そうになって來たので、そろそろ帰り支度をしていると、もう早い雨足が、朽葉の上に軽い足音を立てながら押しよせて來たので、急いで自動車の所まで走り帰る。

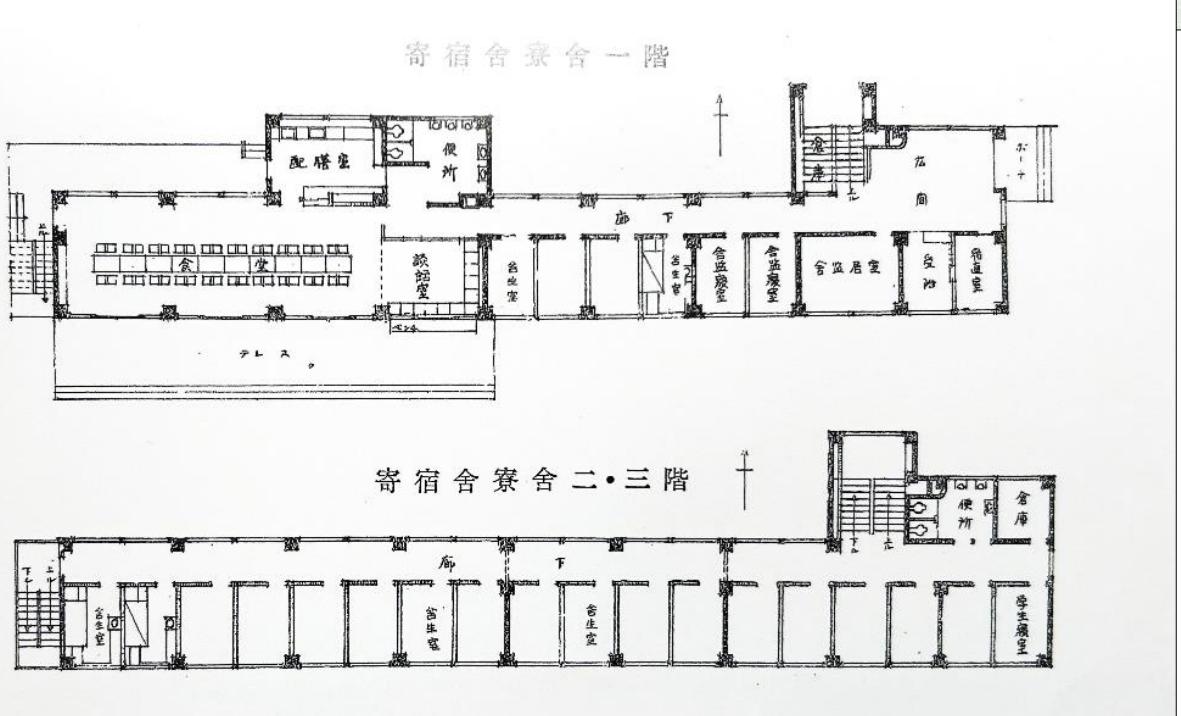
帰途、車にゆられながら、ガラス窓につき当たる雨の零を眺めていると。私の頭の中には、これから建つ寄宿舎のデッサンが、自然と描き出されて來るのであった。幼稚舎で試みたパネルヒーティングを再びここでも成功させたい希望や、日頃から考へている学生都市の新しい生活形式を、あの見晴らしのいい丘の上に、一つ実現して見たい願望などが盛り上って來るのであった。

そしてその描想の中で、さっき崖の上から見下した広い桃畑に、美しい花が咲き出し満開してくるのを禁じ得なくなった。



寄宿舎圖版

「慶應義塾 寄宿舎案」(昭和十二年六月発行、慶應義塾総合研究センター所蔵)より再録



谷口吉郎と日吉寄宿舎 [KUAS 12-05]

見学会の感想文

1/21（火）湘南藤沢慶應高校見学会に参加された高校生から多くの感想文をいただきましたので、何回かに分けて掲載いたします。

◇はじめに、日吉で地下壕見学をするというお知らせを原さんからいただいたとき、私は「地下壕」と「防空壕」の区別がついていなくて、てっきり防空壕のような避難していた場所に行くのだと思っていた。しかし実際には防空壕ではなく、海軍が使っていた地下壕だった。日吉キャンパスの下にこれほど巨大な地下壕があるとは思っておらず、とてもおどろいた。

はじめに聴かせていただいた阿久澤さんのお話では、これまでの授業で身についた戦争の事実を再確認しつつ、日吉という場所が戦争に深い関りがあったことを知った。学徒動員が出されたことで、慶應義塾の学生も戦争に行ったことはなんとなく予想できていたが、慶應の校舎も軍に利用されていたというのは少しおどろいた。たしかに、学生にとって学びやすい環境は、軍人にとっても働きやすい環境なのだと思うので、なるほどなと思った。

私が特に印象に残っているのは、地下壕内できかせていただけ特攻隊のモールス信号の音色だ。80年前、この地で実際にあのモールス信号を受信して特攻隊員たちの最後を見届けていたと考えると、胸がとてもざわざわした。このような日本史を実際に見て、肌で感じることができて、とても貴重な体験だった。

◇「へえ、日吉に地下壕なんてあるんだ」地理の授業で日吉台地下壕見学の案内を受けたときに思ったことだ。大学生になつたら私たちの多くが通うことになる日吉に、戦争遺跡があるということは衝撃的だった。驚きと、地下壕見学は面白そうという単純な好奇心から見学に参加することにした。アジア・太平洋戦争の生々しい痕に触れることになるとは知らずに。

部活で何度も訪れたことのある蝮谷だが、そのすぐ横の地下壕の入り口は異なる時代の空気感を繙っていた。中へ入ると急な下り坂があり、その後は暗い通路が続いているようだった。ガイドさんの詳しいお話を伺っていると自然に戦争中の様子が想像できた。司令長官室にはコンセントのプラグがあったこと、食糧倉庫は二重扉だったことなど、細かな描写が大変分かりやすく興味深かった。中でも衝撃的で心に刻まれたのは電信室でのお話だ。

通信環境の良い日吉台地下壕では戦地からの電信を受信していた、それを受けた電信室では神風特攻隊からのモールス信号をも受信していたとのことだった。当時受信していたモールス信号と同じ音をかつての電信室で聴いたことで戦争の悲惨さを改めて感じた。「ツー」としばらく続いた後の、何もかも飲み込むような静寂。私たちとあまり年齢の変わらない特攻隊員の死を意味している。胸を押し付けられているような感じがした。かつてはここで一日で何件もこのような電信を受信していたかと思うと、戦争の恐ろしさと日吉台地下壕の歴史的大切さが分かった。今年で終戦から80年になる。そのような年に、春から学ぶ日吉の地下に眠る戦争遺跡を見学することができ、感謝しています。世の中が平和であるとは到底言えない昨今、日吉台地下壕のような遺跡を見て、知ることはより一層大切である。電信室で感じた悲劇を二度と起こさないためにも、人類は「忘れない」よう、努めるべきではないだろうか。

◇今回の日吉台地下壕見学をして日吉の歴史を知ることができました。普通に築80年です、と言わなくても18年しか生きていない私たちにはあまり想像することはできません。しかし様々な写真、遺跡、音声などを聞いて実際その場にいるような体験ができ

ました。多くの慶應生が学徒出陣によって戦場へ行かされ、海軍に教室が占領されるという話や暗号室や電信室などの地下作戦室で討論して、人が地雷をもって敵地に飛びこむ話などは心が痛みました。特にモールス信号の音が消える瞬間は本当に残酷だと思いました。また教育自体を変えることによって「国のために死ぬ」ことが名誉とされる世の中になってしまった残酷さも分かりました。私たちがこれから通う日吉のキャンパスの下に歴史を地下に抱えていることを忘れてはいけないと思いました。

◇こんなにもきれいな（崩壊などしていない）戦争遺跡を見ることは初めてでした。今まで見てきた戦争遺跡は原爆ドームなど、戦争の被害がすぐ目に浮かぶようなもので、今回の地下壕は私にとって戦争遺跡にしては余りにも淡白な気がしました。ですが、保存の会の方の話を聞いていくうちに、どんどん灰色のトンネルに当時の状況が重なってきました。特に通信室で神風特攻隊の人たちの信号を受信していたという話が強く印象に残っています。戦機が突っ込んだ瞬間の無音がまだ耳にこびりついています。黙々とモールス信号を聞き続ける少年の背中、新しい作戦を練るために集まつた人々の姿が見えたような気がしました。最初見た時は淡白で現実味がないと思っていました地下壕ですが、この淡白さこそが現実なのだと実感しました。戦争と言われてすぐに浮かぶイメージは空爆が落ちて真っ赤になった町、戦機に乗って攻撃をする軍人、サイレンの音など派手なものばかりで、もちろんそれらのイメージが間違っているわけではなく、空爆によって命を奪われた大勢の市民、戦死した軍人、日々サイレンの音に怯えて生活をしていた人たちがいたことは事実です。彼らのような人を二度と世界から出さないように私たちが動かなければならないということは事実です。しかしそれだけが戦争ではないと思いました。派手で残酷な被害の裏には、下には、淡白で静かなトンネルが隠されていました。被害の報告を集め、攻撃の命令をし、作戦を考えていた戦争の核。世界で最も冷たい場所でした。このことに気づいてから地下壕を再度見てもやっぱり何もないままでした。灰色の壁と天井と床。こんなにも何もないのに、こんなにも多くの人の命について考えさせられる場所はありません。今回の地下壕見学を通して戦争を新しい角度で見ることができるようになり、本当に価値ある時間でした。案内して下さった地下壕の方、ありがとうございました。

◇防空壕に入った瞬間、ひんやりとした空気につつまれた。外の世界とはまるで別の時間が流れてきたようで、足音がひびく静けさに少し不安を感じた。壁や天井はコンクリートや岩肌がむき出しになっていて、当時のままの姿が残されている。照明はあるものの、奥に進むにつれて暗くなり、もし戦争中にここで過ごしていたら、どんな気持ちだったのだろうと想像すると胸が苦しくなった。

特に印象的だったのは、防空壕が単なる避難場所ではなく、実際に戦争の指令を出すために使われていたということだ。ここで作戦がねられ、戦況が報告され、多くの人の命が左右されていたのだと思うと、ただの地下トンネルではなく、歴史の重みを感じる場所だと改めて実感した。また、当時の人々がこの中でどのような思いを抱えていたのかを考えると、戦争の悲惨さがよりリアルに伝わってきた。防空壕を出て、外の明るい光を浴びた時、なんともいえない気持ちになった。今こうして平和な世界で生きていることが、当たり前ではないのだと強く感じたからだ。戦争を知らない世代だからこそ、こうした場所を訪れ、過去に何があったのかを知るのが大切なと思う。今回の経験を通して、歴史を学ぶことの意味を改めて考えられたし、これからも忘れてはいけないことだと心から思った。



◇今回、地下壕見学に参加したことで改めて第二次世界大戦の悲惨さを感じた。慶應義塾の敷地内に地下壕があるのは、学徒出陣によって生徒がいなくなった学校を軍の司令部として使っていたからで、まさに戦争を象徴する場所だと感じた。一番印象に残ったのは通信室内で聞いた、実際のモールス信号である。特攻隊が航空機で突撃する際に、「ツー、ツー、ツー」という信号が通信室に送られ、その音が途切れた時が兵隊が突撃し、亡くなったという合図であった。実際にそれを聞いて、音が途切れた瞬間に鳥肌が立ってしまった。私は今平和な日本で生活していて、戦争というものを身近に感じることはあまりない。しかし、ほんの80年前にはこの日本も戦争の当事者で、私たちと同じか、まだ幼い人たちがその通信の音を聞いていたかと思うと、本当にいたたまれない思いがした。

さらに、当時の戦闘服や戦術などについてのお話も伺った。アメリカの大きな戦艦に対して、潜水兵を海底に配置し、合図で一斉に槍でつくなどという作戦を聞いた時には本当に酷いことをするものだと思った。作戦中に亡くなってしまうならまだ理解できるが、実際には訓練の段階で亡くなった学生も大勢いると聞いて、信じられなかった。その中に慶應の学生もいると聞いて、より虚しく思った。きっと今の私たちと同じように勉学に励み、将来への期待を抱いていた同世代の塾生が亡くなってしまったと思うと本当に胸が詰まる思いだった。大きな戦艦に対して槍が何本か刺さったところで勝てる見込みはないのに、日本は勝てると信じ続けたばかりに、「一億総玉碎」などという言葉も生まれ、国のために死ぬことが美德とされてしまった。

このような人命を粗末に扱うことになる戦争は、何としても起こすべきでなく、それは現在起こっているウクライナ戦争やイスラエルとハマスの対立にも言えることだと感じた。実際に戦争遺跡に出向き、感じたことは教科書で歴史を学ぶこと以上の価値があると感じた。平和ボケしていると言われる日本人こそ、第二次世界大戦の惨禍を継承し、決して戦争をおこすべきではないという教訓を下の世代に伝えていくべきだと感じた。今回は貴重な体験をさせてください、本当にありがとうございました。

◇この度は貴重なお話、解説をしていただきありがとうございました。司令部をなぜ陸に移したのか、なぜ司令部を日吉という地においたのかなど、とても興味深かったです。特に地下壕の構造についてのお話が印象に残りました。通路の幅の意味や外部からの空爆による爆発から壕内を守るための仕組みなど、初めて知ることばかりでとても新鮮でした。他にも当時の様子が写真で残っていることにも驚きました。江戸時代の日常の様子についても公式の文献、文書として残っているものは少なく、筆まめな武士の日記帳が文献となることも多いという話を聞いたことがあります、それと同じように、日常の景色などはあまり記録として残らないものも多いので、記録として多くのものを後世に残しておくことのできる媒体で保存し、伝えていくことの重要性を感じました。

また、神風特攻について、電信室で聞いた特攻の際の音声には胸が締め付けられるような思いがしました。私たちと同じような年齢の人々の命が特攻によって失われてしまったと考えると、改めて、戦争は決して繰り返してはならないと強く感じました。そのため、私たち一人一人が歴史をしっかりと学び、戦争の悲惨さ、平和の尊さを深く理解することが大切だと思います。二度と同じ過ちを繰り返さないためにも過去の歴史から、教訓を得て、今後に生かしていくなければならず、その責任は現在を生き、今後を担う私たち世代にあると感じます。

今回は貴重なお話、ガイドを通じて改めて戦争について深く理解し、考えることができました。今回の経験を今後に生かしていきたいと思っています。改めて、今回はありがとうございました。

◇私は、恥ずかしながら日吉キャンパス内に戦争遺跡があることは薄々知っていたのですが、具体的にどのような施設があったのかなどの情報は全く知りませんでした。今回、日吉台地下壕及びその他の戦争遺跡を見学してみて、戦争は身近なところで行われていたことを再認識しました。実際地下壕に入ってみて感じたことは、思ったよりも綺麗だなということでした。中には今まで見たこともない大きさのゲジゲジがいてびっくりもしましたが、80年ほど前に建てられたものが現在まで綺麗で、中に入れる状態で保存されているのはすごいなと思いました。また、講演ではこれらの地下壕がとても短い期間で作り上げられたことを学びました。過去に頑丈性に長けたものを、早いスピードで作り上げた方々と、現在保存する人々の力が合わさって今日の状態が保たれていることに感動しました。

私は母の実家が広島なので、幼い頃から被爆した親戚に戦争の話を聞かせてもらっていました。そこで聞いた話が私の中でとても印象に残っていて、現在も戦争のことについて積極的に学ぶきっかけになっています。今回保存された戦争遺跡を訪れて、戦争の悲惨さをより実感することができました。恒久平和を願う、唯一の被爆国・日本の国民として、同じ過ちを犯さないために、戦争遺跡を訪れ、肌で感じることはとても重要なことだと感じました。

見学で特に印象に残ったのは、地下壕の中で特攻隊の最後の受電を聞いたことです。静かな地下壕内に響く機械音を聞いて、体当たり特攻の悲惨さを感じ、心が痛くなりました。愛する人を残して国のために命を犠牲にする特攻隊員の辛さはもちろん、その結果を受信する軍人も辛い思いをすることを改めて感じた機会でした。また、広くどこを歩いているか分からなくなる地下壕の調査をして、暗号室の跡地だとか、建造物から過去、その場所で何を行っていたかを考えた人も、最初に立ち入ろうと思った人もすごいなと感心しました。

今回の日吉台地下壕を見学して、キャンパス内には歴史を紐解くいくつもの要素があることがわかりました。ただ学校として通うのではなく、入学後にキャンパス内を散策して、歴史を感じるべきだと強く感じました。簡単には立ち入れない場所に入り、様々なことを学べたとても良い機会でした。

◇私は日吉の弓道場に行くことが中高生活で何度かあったため、塾高の森という看板の存在は知っていたのですが、その奥に広大な地下壕があるとは想像をしたことすらありませんでした。自分が思っていた地下壕は逃げ込むためだけに作られた、ほら穴のようなものだったのですが、日吉台地下壕はコンクリートの壁があり、空気の入れ換えもされ、そして通信用の電線もしかれていきました。そのため、私のイメージは緊急の避難場所というよりかは、第二の拠点という印象に変化しました。

そこで行われたとされる無線のやりとりの再現や、実際にそこで軍が検討していた捨て身特攻の兵器の紹介をしていただいて、戦争中はどんどん人の感覚が狂っていくのだと実感しました。人ひとりを犠牲にしてまで足搔（あが）かなければならぬほど、戦況が追いつめられてしまっていたと同時に、少しでも勝てる確率を上げるためにれば、様々な発想が浮かぶのだなと驚きました。ものによっては、人ひとり失うどころか、実戦では扱われなかつたものの、訓練の段階から大量の死者を出した作戦が存在していることより、本来陸上戦を行わないはずである海軍が、このような特攻作戦を立てていたのであれば、陸軍はどのような戦法を最終的にはとっていたのだろう、と興味を持つきっかけとなりました。

自分が所属する学び舎にこのような戦争と密接に関わっている歴史があることを、大学進学前に知ることができてよかったです。これからもこのことを胸に、自分が今平和な世の中に生きていることに感謝しながら生活しようと思いました。改めまして、貴重な体験をありがとうございました。

◇塾高校舎の脇を抜け、蝮谷に下る階段を途中で横に曲がった先には、厳重に閉ざされた門がそこにあった。その門を抜けると、そこには何の変哲もないただのトンネルが暗闇に包まれていた。別に異世界やら見違えるような風景やらが広がっているわけでもなく、ただ綺麗に整備されたトンネルが続いていた。それもそのはず、私たちが訪れたのは日吉台地下壕という戦争末期に、本塾大学日吉キャンパスの地下に構築され、旧帝国海軍が利用した地下壕である戦争遺跡だ。

戦争遺跡といえば、沖縄の各地に残っているようなガマや銃弾痕のような、人の命をその身で感じるようなものを想像することが多いと思う。私自身もそうであった。地下壕に入る際には、何か異様な雰囲気を感じることを予想していたのだが、実際に入ってみてもそのようなものを感じることはなく、ただのトンネルを通っている感覚であった。身構えていた身としては正直拍子抜けに感じもしたが、ここで大勢の方々が亡くなったわけでもなく、連合艦隊司令部などが入り、前線へ指令をだしていくだけであるため、当然と言えば当然である。司令部が入る地下壕としては急造であるものの、設備は充実していると感じた。空気孔や壕内の風通し、下り坂でのすべり止めなど、細やかな点まで気が配られているようだった。役割的にも人員的にも必配なものであったのであろうとは思うが、前線と比較してしまうと何とももどかしく、やりきれない気持ちになってしまう。とは言えども、日吉台地下壕で任務に当たっていた方々の事を考えると胸を締め付けられる。暗号室、通信室では特攻の通信を確認していたと聞いた。この話自体は聞いたことがあったものの、実際にその場で「ツー」という音を聞かせていただいた時、言葉では形容し難い感覚、感情が押し寄せてきた。まるで当時を目の当たりにしているかのようであった。

今回は日吉台地下壕を見学させていただき、多くのことを学ばせていただいた。4月から通うことになるであろう日吉キャンパスの下にも戦争の記憶があることを心に留めておこう。この度は、お忙しい所、私たちのために地下壕を案内してくださり、誠にありがとうございました。

◇私は今回の日吉台地下壕の見学を通じて、改めて戦争は絶対にしてはいけないと再確認させられた。日吉台地下壕は、海軍総司令部が置かれた場所であり、現在も良い状態で残っているほど頑丈に作られた建物だった。しかし、入口付近や壁等には当時の工事の様子がリアルに残っており、その苦労が伝わってきた。奥に進むと、広い空間や電灯、洗面台の痕などがあり、ここがかつて司令部の施設のひとつであったことを改めて実感した。

また、この場所で特攻など多くの愚かな作戦をたてていたことを初めて知った。当時、慶應の学生は学ぶことができず、約2,000人の塾生が亡くなるという最悪な状況に陥っていた。それにもかかわらず、海軍の中には大戦末期になっても徹底抗戦を訴える者がいたという話を聞き、とても呆れると同時に、多くの兵が亡くなるような戦略がたてられた地に、まさにいることに複雑な気持ちを抱いた。

今回の学習では、改めて尊い命の犠牲を生まないためにも、絶対に戦争をしない日本を保たなければならないという事を強く考えた。そして、日吉台地下壕という戦争の無意味さを説いてくれる施設が、今後も学びのために保全されていくことを願いたい。

◇はじめ、地下壕がどんな場所で、何に使われていたのか全く知らず、戦争末期の過酷な時代にあった遺跡だと知って衝撃だった。頑丈な作りがほどこされていたり、快適な寄宿舎が設けられている一方で、そこに生活していた人々の様子は切羽詰まっていたのだと思うと、その温度差に辛さを感じた。また、特攻作戦の計画を練ったり、地上戦の影が忍び寄っていた当時の日吉のことを想像したときに、かつての学び舎の様子が一切浮かんでこなかったことに、改めて戦争は平和な日常に関して私たちを盲

目にさせるという恐ろしさを実感した。現代、日本はとても平和で、自分の学校がもし戦争で使えなくなったら、好きに学ぶことができなくなったら、ということを考えようとしても、中々実感が湧かないと思うところは正直ある。しかし、今回の見学で感じた漠然とした切なさや恐怖は私にとって大きな引っかかりになったと感じている。当たり前に自分の学びたいことを学びきることのできる今の貴重さがより感じられ、だからこそ、本来の学び舎にふさわしい学生でありたいと強く思った。有事は想像以上に身近で起こりうることを自覚しつつ、戦前の慶應義塾の学生も羽ばたきたいと願った世界が、これから先は永く明るいものであるよう、今後の大学での学びをそういう将来のために活かしていきたいと思った。見学に行ったからこそ、慶應義塾で学ぶ意義が増えたように感じている。貴重な経験ができたことと、当時の様子を丁寧かつ鮮明に説明してくださったガイドの方々に感謝し、今回の教訓を忘れずにいたいと思う。そして、機会があれば、また講義等での見学などに参加して、より深く、当時を知ることの学びは何か、考えてみたいと思う。

報告

慶應義塾 2025 入学式と卒業 50 年生大同窓会

4月1日、日吉キャンパス記念館にて今年度の入学式が開催され、恒例行事として卒50年OB・OG（1250名）が応援団として入学式に参加しました。これに先立ち、前日に横浜パシフィコ会議センターにて卒50年生（831名）の大同窓会がおこなわれ、卒業後の活動について各々披露する催しがあり、多くの活動内容が披露された中、当会としても活動内容を発表。少なからぬ人々の関心を集めました。

運営委員 小山信雄

日吉台地下壕保存の会の活動

私達の会は、日吉キャンパスにある旧帝国海軍地下壕の保存・調査・活用などを目的に、1989年に発足した市民団体です。現在の個人会員数270名、ガイド等実際の運営に携わる約20名で活動している団体です。

先の大戦末期、日吉キャンパス一帯に連合艦隊司令部をはじめ海軍の複数の部局が移転し、現塾高校舎や寄宿舎など地上施設の利用に加え、総延長5kmに亘る大規模な地下施設が建設されました。現在は地下壕では連合艦隊司令部に限定されますが、毎月2回の定例見学会を行っており、毎回大勢の見学者が訪れてています。見学者をご案内するガイドの養成には力を入れており、毎年養成講座を開催し、新人ガイドの方々に活躍して頂いております。また、昨年は多くの新刊書の発行も果たせました。



日吉台地下壕保存の会の活動

私達の会は、日吉キャンパスにある旧帝国海軍地下壕の保存・調査・活用などを目的に、1989年に発足した市民団体です。現在の個人会員数270名、ガイド等実際の運営に携わる約20名で活動している団体です。

先の大戦末期、日吉キャンパス一帯に連合艦隊司令部をはじめ海軍の複数の部局が移転し、現塾高校舎や寄宿舎など地上施設の利用に加え、総延長5kmに亘る大規模な地下施設が建設されました。

現在は地下壕では連合艦隊司令部に限定されますが、毎月2回の定例見学会を行っており、毎回大勢の見学者が訪れています。見学者をご案内するガイドの養成には力を入れており、毎年養成講座を開催し、新人ガイドの方々に活躍して頂いております。また、昨年は多くの新刊書の発行も果たせました。

活動の記録 2025年1月～4月

- 1/24(金) 阿久澤さん講演 慶應俱楽部1月例会
1/25(土) 定例見学会 40名
1/30(木) 会報160号発送作業
2/5(水) 定例見学会 41名
2/6(木) 運営委員会 来往舎小会議室
2/15(土) 下田町フィールドワーク 14名
2/22(土) 定例見学会 40名
2/25(火) 地下壕見学会（午前）慶應義塾高校「協育プログラム」26名
（午後）田園調布学園高校 10名
3/1(土) 阿久澤さん講演 慶應義塾大学教職課程センター研究交流・懇親会
3/3(月) 地下壕見学会 緑が丘中学校3年（午前）72名（午後）66名
3/6(木) 運営委員会 来往舎205室
3/8(土) 地下壕見学会 公文国際学園高校 19名
3/12(水) 定例見学会 34名 共同通信 1名
3/20(木) ガイド学習会 日吉地区センター中集会室 16名
3/22(土) 定例見学会 41名
3/29(土) 明治大学平和教育登戸研究所資料館見学 18名
4/3(木) 運営委員会 来往舎小会議室
4/4(金) わが住む街を愉しむ会との事前打ち合わせ
港南区社会福祉協議会
4/9(水) 定例見学会 42名
4/12(土) ガイド養成講座第1回 来往舎中会議室
受講者17名

○お問合せ・申込みは見学会窓口まで

連絡先

(見学会) 電話 080-5612-6344
佐藤 メールアドレス 
hiyoshidaichikagou@gmail.com

(会計) 亀岡敦子：〒223-0064
横浜市港北区下田町 5-20-15
電話 045-561-2758

(その他) 喜田美登里：〒223-0064
横浜市港北区下田町2-1-33
電話 045-562-0443

ホームページ・アドレス：
<http://hiyoshidai-chikagou.net/>



ツクシンボウ



コサギ

日吉台地下壕保存の会会報

(年会費) 二千円

発行 目吉台地下壕保存の会運営委員会 会長 阿久澤武史

郵便振込口座番号 00250-2-74921

加入者名 目吉台地下壕保存の会